

インターブルへの参加と我が国の乳用牛改良

元 独立行政法人 家畜改良センター 安宅 倭
(現 農林水産省大臣官房企画評価課)

乳用牛の遺伝的能力は、我が国の酪農が高い生産性を実現するために重要な要素の一つであり、我が国が他の酪農先進国に負けない高い遺伝的能力を持った牛を持つことは、国際化が進む厳しい酪農情勢に対応するための必須課題となっている。

我が国を含む多くの国々では、乳量が多く経済性に優れたホルスタイン種が主要品種として活躍しており、人工授精等の繁殖技術の進歩とあいまってその遺伝子資源がビジネスとして広く、世界中に流通している。しかしながら、乳用牛が発揮する能力は時として飼養環境に左右されることから、輸入した遺伝子資源が必ずしも、我が国で能力を発揮するとは限らない。こうした事情から、我が国では、国の主導により乳用種雄牛の後代検定事業が実施され、環境に適した遺伝子資源が供給されてきたものの、国内検定済み遺伝子資源は厳しい国際競争にさらされてきた。特に近年では、根強く残る舶来信仰によって、能力的に低い、輸入する必要のない遺伝子資源まで輸入されているのではないかと、という危惧が強まったことから、国内検定済みの遺伝子資源と海外から直接輸入される遺伝子資源の能力を、我が国の飼養環境において直接比較することが課題となっていた。

乳用種雄牛の能力を国際的に比較する国際組織としては、スウェーデンに本部を置く国際組織である、インターブルが1990年代半ばから活動しており、主要な酪農国がここに参加をしている。そこで、(独)家畜改良センターでは、90年代末から我が国の検定済み遺伝子資源の能力について、様々な角度から客観的な立場で検討をすすめてきた。そして平成15年8月、我が国はアジア唯一の国としてインターブルの実施する国際種雄牛評価に参加し、国際的な乳牛改良体制への仲間入りを果たしたところである。

従来の我が国の乳牛改良は、北米から遺伝子資源を導入するスタイルが中心であったことから、「常に一步おくれている」という考えが支配的であった。しかしふたを開けてみると、国際種雄牛評価によって、候補種雄牛として生体で輸入した牛や輸入受精卵から生産した牛ばかりでなく、我が国の雌牛から生産された種雄牛、我が国の後代検定参加種雄牛を父に持つ種雄牛も予想に反し好成績をあげたことから、我が国にある遺伝子資源を活用した優れた牛づくりが可能であることと同時に、今日までの我が国の関係者の努力が決して無駄ではなかったことが明らかになったところである。

BSE、鳥インフルエンザといった様々な家畜疾病の発生により、家畜・家禽全体の遺伝子資源を国外に頼ることの是非が話題になっている。技術もそれを取り巻く環境も常に変化し続けるものであることを常に念頭に置き、積極的な研究活動や情報収集によって、国内外から信頼される優れた遺伝的改良のための体制を維持すると同時に、国内外の遺伝子資源を適切に利用した遺伝的改良をすすめることが、今後ますます重要であると思われる。